ISSN 2185-341X

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

縄文時代初頭の移動とルートについて…… 重田　勉（1）

近江地域のカマド形土器
－渡来系集団の動向把握にむけて－ …… 辻川 哲朗（6）

出土文字資料に近江古代史を求めて
－付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」－ …… 濱　修（18）

正倉院文書に見える三雲寺の所在地について…… 小松 葉子（26）

奈良時代の地域開発と神社本殿
－蒲生野・金貝遺跡の調査成果から－ …… 中村 智孝（39）

近江における瓦器の基礎的研究…… 堀　真人（50）

安土城の空間特性　―安土城は神社だ― …… 大沼 芳幸（67）

高島郡における山城の築城画期 …… 小林 裕季（75）

将棋史研究ノート8　―歩兵の存在感― …… 三宅　弘（84）

研究ノート　近代化の痕跡
―彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物― …… 小島 孝修（89）

琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
―滋賀県の遺跡における古生態学データの集成― ……
林 竜馬・佐々木 尚子・瀬口 眞司（97）

30

公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2017. 3

近江における瓦器の基礎的研究

堀　　真　人

１．　近江における瓦器研究の動向

(1) 研究史

瓦器は、近畿地方で多く出土することから、その研究も近畿地方を中心に進んできた。1960年代に稲垣晋也氏と白石太一郎氏の両氏の編年が提示されたことにより、年代的な「ものさし」ができ、体系的な研究に着手できる下地が整ったといえる（稲垣1961・白石1969）。この段階では資料的な制約から、稲垣氏は大和、白石氏は大和・山城・河内・和泉の出土品を中心に編年を組み立てていた。その後、1980年代になると橋本久和氏が畿内および周辺で出土する瓦器椀を「大和型」「和泉型」「樟葉型」「丹波型」「紀伊型」に分類し、編年の大要を示した（橋本1980）。それを受けて「和泉型」「大和型」「紀伊型」「丹波型」の各地の編年体系が整った。そして各地域の様相が明らかになっていくに従い、畿内周辺においても「近江型」「伊賀型」とも呼べる在地産の瓦器の存在が明らかになっていく（森1986・山田1986）。

(2)「近江型」の提唱

森隆氏が提唱した「近江型」の基準となった資料が、旧蒲生町（現東近江市）の蒲生堂廃寺跡の調査で検出された土坑SK8･9から出土品である（北川1985・蒲生町教委1989）。北川浩氏はこの蒲生堂廃寺跡土坑SK8･9出土瓦器を「大和型」の範疇で理解できるものの、「大和型」にみられない下記の特徴に注目して、在地生産の瓦器として評価した。

・見込みが大和型と比して広い。
・外面のミガキ調整が丁寧である。
・胎土は非常に精良で、水簸調整された粘土を使用している。

そのうえで、共伴しているいわゆる近江型黒色土器および土師皿から11世紀末から12世紀初頭との年代を付与している。

その後、蒲生堂廃寺跡出土瓦器も含めて、近江に見られる瓦器の中で在地色の顕著な個体をとりあげて、その特徴を以下のように整理している（森1992. p 108）。

①器形に斉一性が乏しい。
②型作りではなく紐作りのものがみられる。
③暗文ヘラ磨きの手法が「大和型」に比べて規格化されておらず粗雑な傾向がある。
④特に外面の暗文ヘラ磨きの手法が、12世紀以降急速に省略化が進行し、12世紀後半頃には外面へのヘラ磨きが全く省略されたものが出現する。
⑤内面見込みの面積が「大和型」と比べて大きいものが多い。
⑥内面見込みの暗文ヘラ磨きにジグザグ平行線状のものが12世紀代まで残存する。
⑦炭素の吸着が「大和型」と比較して悪く、光沢の無い黒銀色から黒褐色を呈するものが多い。

そして、「大和型」と比べて独自色の強い一群と、類似性が認められる一群に分け、前者を「近江型」とした。「近江型」瓦器は蒲生堂廃寺出土品を最古段階（11世紀後半～11世紀末）として大まかな変遷の見通しが示され、13世紀中頃には消滅するとした。分布に関しても、その中心は東近江市の南部（旧蒲生町）、日野町が中心で、この地域で瓦器生産が行われていたとした。

２．　本論の目的とその方法

畿内周辺における地域型瓦器の一つとして提唱された「近江型」瓦器であるが、森氏が提唱した段階と状況が大きく変わっている。それは、調査件数および地域の拡大にともなう資料の増加である。

そこで現段階の資料を整理し直し、「近江型」の位置付けについて検討を試みたい。その作業は以下の通りである。

①近江における瓦器の分布について再整理し、各地域の動向をチェックする。
②近江における瓦器の変遷を整理し、「近江型」の再評価をおこなう。

①は森氏が分布圏を示した段階では、調査事例が少なかった旧甲賀郡域、大津市南部域の事例が加わったことにより、見直しが必要となってきている。②については、森氏によって大枠が示されているものの、実際の変遷が詳細に示されているわけではない。併せて、周辺地域との関係についても言及したい。

３．　分類の提示

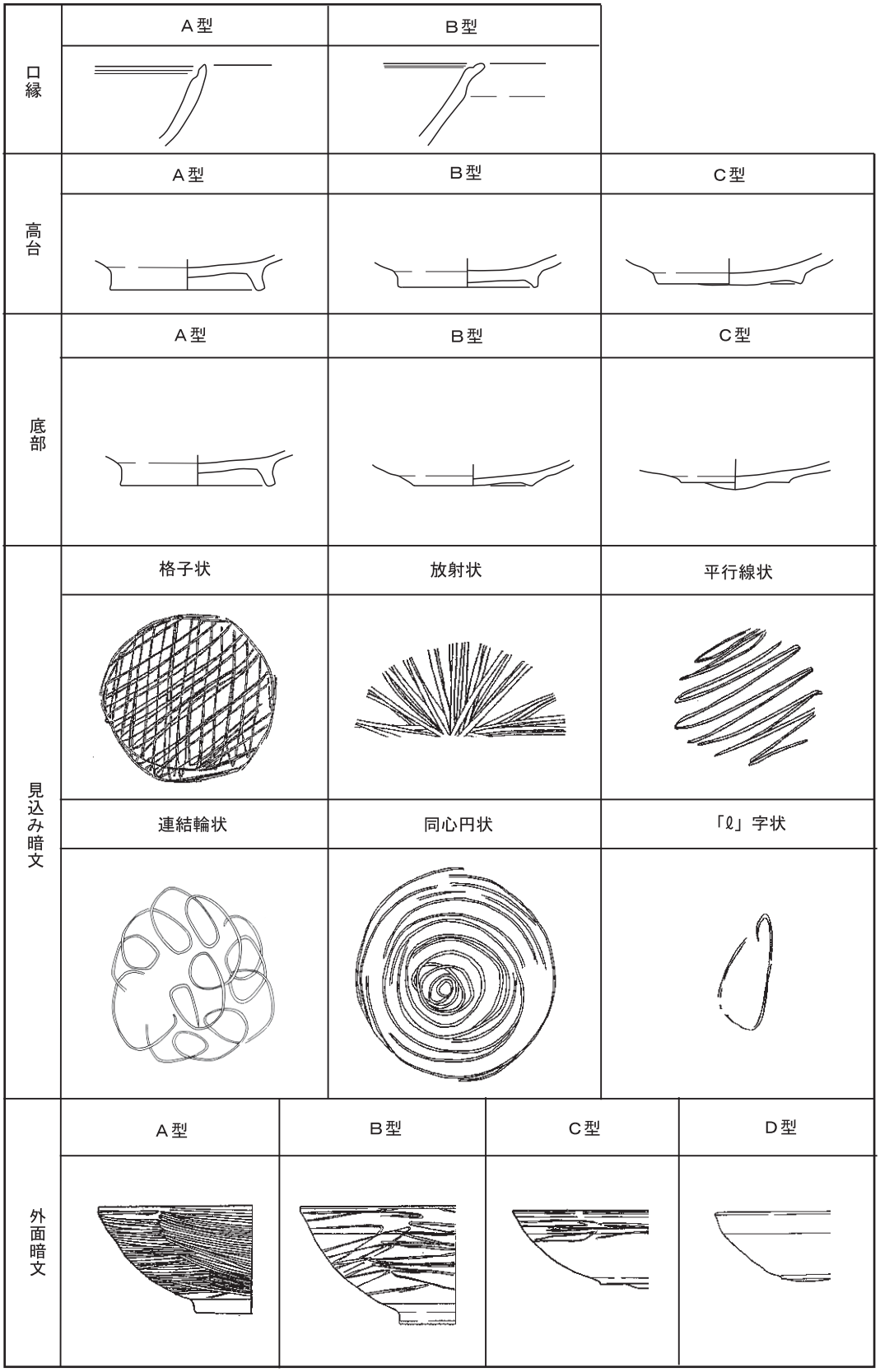
本稿において、森氏が提唱した「近江型」の概念を再度評価することを目的の一つにあげたことから、今一度、出土している瓦器の諸特徴を整理するために分類案を提示し、それに沿って検討を進めていきたい。

まず、その分類案であるが、近江における瓦器の特徴は、大和型の範疇でおおむね理解できるという前提に立ち（近江1992・森島1995）、行うこととする。また、大和型の瓦器について詳細な分類を行っている事例（松本1992）を参考にしながらおこなう。

(1)分類（第１図）

①器形

ｉ）口縁部　特徴は二つの属性に分けることができる。そ


口縁
A型
B型
高台
A型
B型
C型
底部
A型
B型
C型
見込み暗文
格子状
放射状
平行線状
連結輪状
同心円状
「ℓ」字状
外面暗文
A型
B型
C型
D型

第１図　形態分類

れはともに大和型の特徴ともいえる属性で、一つは端部内面に施される沈線の位置、もう一つは端部に施されるヨコナデによる外反の有無である。

口縁部Ａ型　内面沈線が端部よりやや下方で浅く、ヨコナデが弱い。口縁部の境界があいまいで外反しない。

口縁部Ｂ型　内面の沈線が端部直下に明瞭に施され、強いヨコナデにより、端部と体部の境界が明瞭で、外反させる。

ⅱ）高台　高台は大和型の変遷においても注目されるポイントで、断面形状および高低である。

高台Ａ型　断面形が長方形もしくは逆台形で、比較的高さがあるもの

高台Ｂ型　断面形が逆直角三角形状を呈し、Ａ型に比して低いもの

高台Ｃ型　断面形が低い逆二等辺三角形状を呈し、Ａ・Ｂ型に比して低く、個体によっては高さがほとんどないもの

ⅲ）底部　高台と底部との関係である。高台の形状と相関している可能性が高い。

底部Ａ型　高台によって底部が中空になっているもの

底部Ｂ型　高台を持つが底部が接地するもの

底部Ｃ型　高台を持つが、高台より下方に突出しているもの

②暗文(1)

ⅰ）内面見込み

格子状

放射状

平行線状

連結輪状

同心円状

「ℓ」字状

ⅱ）外面

外面暗文Ａ型　単位が明瞭で密に施されている

外面暗文Ｂ型　単位が不明瞭で疎である

外面暗文Ｃ型　口縁端部周辺のみ

外面暗文Ｄ型　暗文が施されない

４．分布とその内容

(1) 分布状況（第２図・表１）

瓦器の分布状況については、県下および地域限定のものも含めて、すでに検討・提示されている（森1992、藤岡ほか2005、甲賀市2012、辻川2012）。ここでは、それらの業績を踏まえながら、現時点での瓦器の分布をまとめておきたい。その方法は、既刊行の報告書で報告されている瓦器について検索した。その結果は図２・表１のとおりである。なお、表示方法は、報告書（調査地点）単位の出土個体数をカウントした。そして、遺跡単位の総数で20個体以上と未満の二段階に分け、さらに瓦器と並んで近江で供膳具の主体となる近江型黒色土器(2)との優劣勢を示すこととした。また、少数の出土のため近江型黒色土器との優劣勢が確認できない場合は、瓦器出土遺跡とするにとどめた。

瓦器が出土している遺跡は146遺跡である。分布範囲は、湖西高島市の正伝寺南遺跡が最北端、湖北長浜市の宮司遺跡が最東端である(3)。ただし、現在整理調査中で報告書が未刊行の長浜市の塩津港遺跡で瓦器が出土していることから(4)、実態としては、最北端は湖北長浜市の塩津港遺跡ということになろう。ただし、その分布の濃淡をみていくと、濃厚な地域は、西が大津市南部、東が近江八幡市、南が甲賀市の範囲となる。そして、その出土量は大津市南部田上低地周辺、草津市域、甲賀市域、東近江市（旧蒲生町）～日野町で、近江型黒色土器より瓦器が主体でなおかつ20点以上出土している遺跡が複数みられる。

このように瓦器分布域内においても、濃淡がみられることから、分布域を大きく４地域（湖南南部・湖南北部・湖東・甲賀南部）に分けて、出土状況が良好な主な遺跡（遺構）を詳細にみていくこととする。

①湖南南部地域

湖南南部地域は、瀬田川流域の大日山から下流域および田上低地が相当する。古代田原道が通っていた地域で、南山城・大和地域へのルートにあたる。調査された遺跡数はあまり多くないが、まとまった資料が多くある。

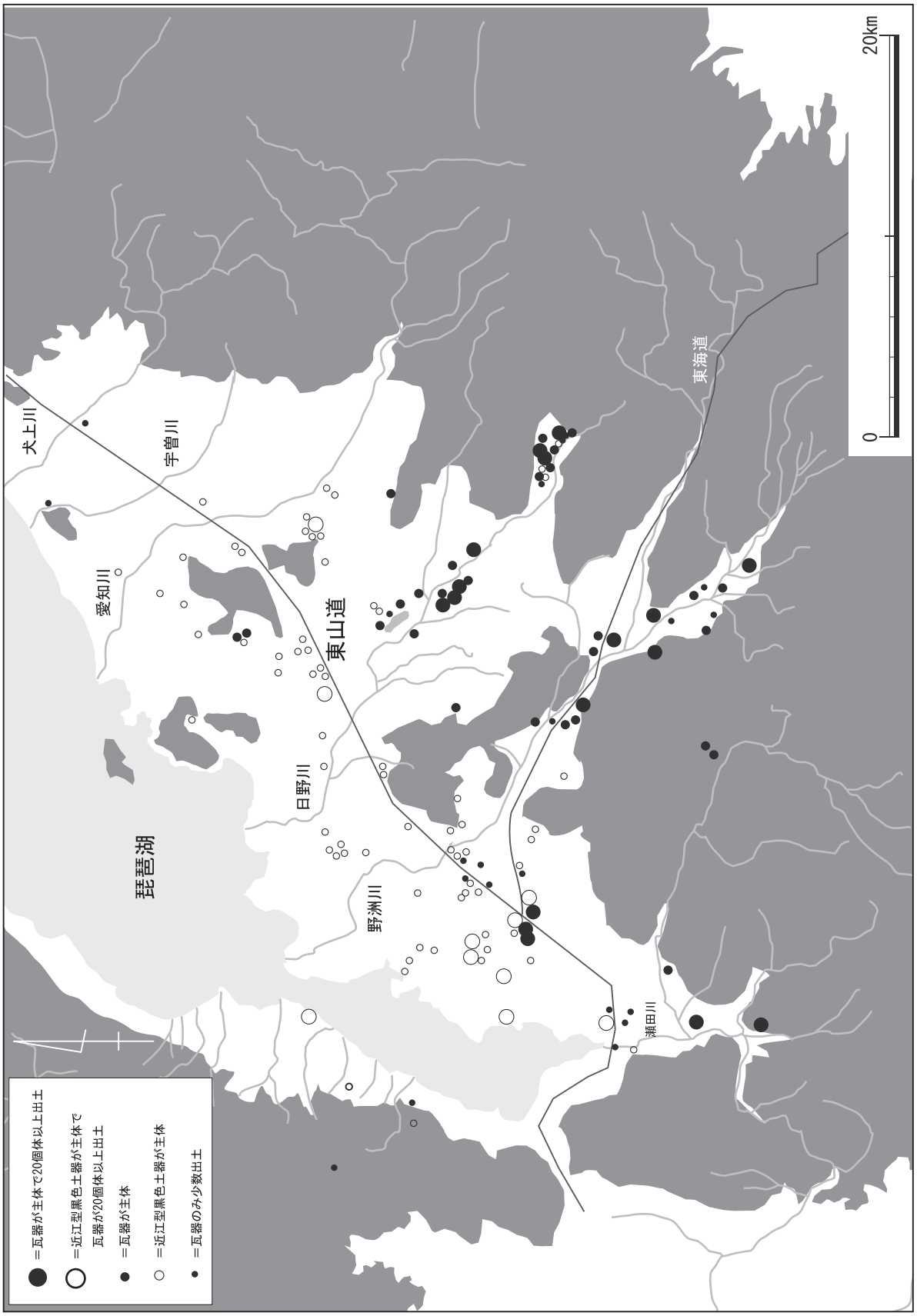
【主な遺跡】関津遺跡、大石城遺跡

◆関津遺跡T91-S1（大津市：県教委・協会2010）(5)

S1は、不定形な流路で幅が最大20ｍ前後を測り、複数回の流水と埋没を繰り返していたため、地点によって堆積状況が異なっている。その中で上・中・下の三層の分けられる埋土の中層から比較的まとまった資料が出土している。遺物は瓦器、土師皿、近江型黒色土器、白磁碗等が出土している。

瓦器　口径が14㎝後半から15㎝前半台、器高は５㎝後半台が中心である。口縁部はＡ型、高台はＡ型、底部はＡ型で見込みの暗文は、平行線状のものが主体であるが格子状、複数回転の連結輪状もみられる。外面の暗文は、単位が比較的はっきりしたＡ型である。皿は見込みの暗文が格子状のものが多く、体部内面にも横方向の暗文が認められる。体部は底部から小さく外反し、口縁端部を丸く収める。

その他の土器　土師皿は口径が９㎝後半から10㎝前半の小型品と15㎝台から16㎝前後の大型品に分けられる。小型品の中にはいわゆる「て」の字形口縁もみられる。一段ナデ仕上げの体部が中心で、端部を小さく外反させる。白磁碗はⅣ類・Ⅷ-2類（横田・森田1978以下同様）である。近江型黒色土器は口径15㎝前半台が中心で、断面形が長方形から逆台形を呈するしっかりした高台を持つ。外面の暗文も密に施されている。森編年のⅠ-4からⅡ-1の特徴を有して



第２図　近江における瓦器の分布

いる（森1986）。

時期(6)　11世紀後半から12世紀前半

◆関津遺跡T2-S24（大津市：県教委・協会2007）

S24は、幅が１～２ｍ、深さが0.5～0.8ｍを測る調査区内で直線的に延びる溝である。複数回の堀直しが行われているが、埋土ごとに複数期にわたるような明確な時期差は認められない。遺物は瓦器をはじめとして土師皿、白磁が出土している。

瓦器　口径は14㎝代が中心で、器高が５㎝後半から６㎝前半が中心である。口縁部はＡ型がわずかでＢ型が主体、高台はＡ・Ｂ型でほぼ拮抗する。底部はＡ型で、少数ながらＢ型に近いものも認められる。見込みの暗文は平行線状・複数回転の連結輪状が認められ、連結輪状が優勢である。外面の暗文はＡ型も認められるがＢ型が主体である。皿は見込みの暗文が平行線状のものが主体で、わずかに格子状のものが認められる。体部内面の暗文は施さないものが大半である。

その他の土器　土師皿は、口径が９㎝台の小型品、14㎝台が中心の大型品が認められる。二段ナデと一段ナデ仕上げの体部が認められるが一段ナデが主体である。口縁端部は、断面形三角形のものと小さく外反させるものがある。白磁皿はⅡ-1類、碗はⅣ類である。大和型の土師器の羽釜が出土している。

時期　12世紀前半から中頃

◆関津遺跡T28-S3（大津市：県教委・協会2007）

S3は幅1.2～1.6ｍ、深さ最大0.75ｍを測る溝である。埋土状況から流水があったと想定される。遺物は瓦器、土師皿・羽釜、白磁、東播系須恵器の捏鉢等が出土している。

瓦器　口径が14㎝前半台、器高は５㎝前半台が主体である。口縁部はＡ・Ｂ両型がみられるが、Ｂ型が優勢である。高台はＡ・Ｂ両型確認できるがＢ型が主体である。底部はＡ型である。見込みの暗文は複数回転の連結輪状である。外面の暗文はＢ型でかなり疎である。皿は見込みの暗文が密な平行線状で、体部内面の暗文は施しているものとないものが存在する。

その他の土器　土師皿は、口径が９㎝台主体の小型品と14㎝台が中心の大型品がみられる。体部は基本一段ナデ仕上げで、口縁端部を小さく外反させるものが多い。白磁碗はⅧ類である。土師器の羽釜は大和型と在地通有のものが出土している。

時期　12世紀中～後半

◆関津遺跡E区土坑SK42（大津市：県教委・滋文保協2008）

SK42は126×107㎝の方形を呈し、深さは20㎝を測る。遺物は瓦器をはじめとして土師皿・羽釜、瓦器、東播系須恵器、白磁が出土している。

瓦器　口径は12㎝後半から14㎝前半で、14㎝台の割合が高い。口縁部はＢ型、高台はＣ型、底部Ｂ～Ｃ型である。暗文は連結輪状もしくは同心円状で、外面はＣ～Ｄ型である。皿は内面見込み部分に平行線状の暗文が認められ、直線的に延びる体部で、口縁端部を小さく外反させる。

その他の土器　土師皿は口径が７㎝後半代から８㎝前半の小型品と12㎝前半台から13㎝前半台の大型品が確認できる。体部は一段ナデ仕上げで、端部が断面三角形を呈する。白磁碗はⅣ-2類、Ⅷ-1類が出土している。羽釜は大和型が出土している。

時期　13世紀初頭

◆大石城遺跡第2調査区土坑S34（大津市：県教委・協会2016）

1.8×1.9ｍの方形の土坑で、深さは42㎝を測る。遺物は瓦器の椀・皿、土師皿等が出土している。

瓦器　口径は８㎝から13㎝台のものが確認できるが、９㎝台のものが中心である。器高も３㎝前半台である。口縁部Ｂ型、高台はＣ型、底部Ｃ～Ｄ型である。暗文は見込みが同心円状、外面は基本がＤ型で、口径の大きな個体でＣ型のものが認められる。

その他の土器　土師皿は口径が8.2㎝の小型品、11㎝が中心の大型品が認められ、体部が外反し、口縁端部は丸く収め、口縁端部から底部にかけて薄くなる傾向がみられる。常滑焼の甕は、口縁の断面が「N」字状を呈する。

時期　13世紀後半から14世紀前半

②湖南北部地域

湖南北部地域は、瀬田川流域の大日山より上流域の大津市と草津市、守山市、栗東市、野洲市、湖南市域が相当する。この地域は、供膳具としていわゆる近江型黒色土器が卓越する地域である。その中で、草津市の野路岡田遺跡周辺では、近江型黒色土器と瓦器の出土量が均衡もしくは瓦器が卓越する状況がみられる。出土する遺跡は多いものの、遺構単位でまとまった資料は少ない。

【主な遺跡】野路岡田遺跡、中兵庫遺跡、西海道遺跡、柳遺跡

◆中兵庫遺跡T5土坑62（草津市：県教委・協会2001）

土坑62は長軸3.4ｍ、短軸1.5ｍ以上、深さ１ｍを測る土坑である。埋土は７層に分けられ、上層の１～４層で遺物がまとまって出土している。４層は炭層で、６層は木葉の集積層であった。調査担当者は井戸の可能性を指摘している。遺物は瓦器、近江型黒色土器、土師皿等が出土している。

瓦器　口径は15㎝の後半台で、器高は5㎝後半を測る。口縁部はＢ型、高台はＢ型、底部Ａ型である。暗文は見込みが複数回転の連結輪状で、外面はＡ型である。

その他の土器　土師皿は、口径8㎝後半から９㎝前半台の小型品が出土している。基本体部は一段ナデ仕上げで、口縁端部断面が三角形を呈するものと丸くおさめるものが認められる。供膳具は近江型黒色土器が主体で、口径が14㎝後半～15㎝前半が中心である。外面の暗文は比較的疎、高台の断面が逆台形で高さがある。

時期　12世紀中頃

◆柳遺跡A区土坑SKA02（草津市：草津市教委2008）

SKA02は長さ1.8m、幅2.7m、深さ１mを測る大型の土坑である。遺物は土師皿、近江型黒色土器、瓦器、東播系須恵器が出土している。

瓦器　口径は15cmで、器高は５cm前後である。口縁部はＢ型、高台はＢ・Ｃ型、底部Ａ型である。暗文は見込みが複数回転の連結輪状で、外面はＡ型である。皿は内面見込み部分に平行線状、体部内面に圏線状の暗文が確認できる。

その他の土器　土師皿は、口径９cm台が中心の小型品と15cm台の大型品が出土している。基本体部は一段ナデ仕上げで、口縁端部断面が三角形を呈するものと丸くおさめるものが認められる。供膳具は近江型黒色土器が主体で、口径が14～15cm、外面の暗文は疎で、高台の断面が逆台形で低い。東播系須恵器の捏鉢が出土している。

時期　12世紀後半

◆西海道遺跡B6e区SE5（草津市：草津市教委2013）

SE5は長軸7.1m、短軸3.2m以上を測る掘方を持ち、深さは２mを測る井戸である。最上層とそれ以下の層で時期差が認められる。最上層を除く時期の遺物は、近江型黒色土器、瓦器、土師器、木製品が出土している。

瓦器　口径は15cm前後、器高５cm前後である。口縁部はＢ型、高台部はＡ・Ｂ型、底部はＡ型である。見込みの暗文は複数回転の連結輪状で、外面の暗文はＢ型である。

その他の土器　土師皿は口径が９cm前後の小型品と15cm前後の大型品が出土している。体部は一段ナデ仕上げで、口縁端部の断面形が三角形を呈するものと、小さく外反させるものが認められる。近江型黒色土器は完形に復元できる個体が無いが、口径が15cm後半台、高台は断面長方形で高さがある。外面全体に暗文が認められる。

時期　12世紀後半

③湖東地域

湖東地域は、日野川以東の旧蒲生郡を中心とした地域である。市町でいえば近江八幡市、東近江市（旧八日市市・旧蒲生町）、日野町が相当する。この地域も湖南北部地域同様に、供膳具としていわゆる近江型黒色土器が卓越するが、湖南北部地域と比して瓦器の割合が高い地域である。しかし、細かくみると山側（旧蒲生町、日野町）と湖側（近江八幡市）では状況が異なり、前者は瓦器が卓越する地域、後者は近江型黒色土器が卓越する地域である。瓦器が出土する遺跡・遺構は比較的多い。

【主な遺跡】　蒲生堂廃寺跡、アリヲヲジ遺跡、野瀬遺跡、市子遺跡、松尾遺跡、川合寺遺跡、内堀遺跡、奥野遺跡

◆蒲生堂廃寺跡第2地区SK9（東近江市：北川1985・蒲生町教委1989）

SK9は短軸1.3m、長軸1.8mの楕円形を呈し、深さ20cmを測る土坑である。調査担当者は土器焼成用の土坑であると推定している。遺物は土師皿、近江型黒色土器、瓦器がまとまって出土している。

瓦器　口径が15cm前後で器高が５cm後半から６cm台、高台径が５cm後半から６cm台である。口縁部Ａ型で、口縁端部内面の沈線がやや下方で、途切れがちである。高台Ａ型、底部Ａ型で、暗文は格子状・放射状・平行線状とバリエーションがあり、外面は５～６分割のＡ型である。歪が大きく、また器壁は厚い。非常に重量感がある。また、遺存状態が悪いこともあり、炭素の吸着状況が悪く、光沢感はない。皿は見込みの暗文が密な平行線状で、体部内面に密な横方向の暗文が確認できる。

その他の土器　いわゆる近江型黒色土器は遺存状態が悪いため調整法が確認できないが、口径が15cm後半台、器高は5.4cm、逆台形を呈したしっかりした高台である。土師皿は大小２種類で、小型品は８～９cm前半台、大型品は直径が14.2～16.2cmで体部は二段ナデと一段ナデで仕上げるものがある。また、口縁端部の仕上げもやや外反させるものと丸く収めるものが混在している。

時期　11世紀後半

◆松尾遺跡F区SK-1（日野町：日野町教委2001）

SK-1は長さ1.3m×0.7mの楕円形を呈しており、深さは約25cmを測る土坑である。埋土は、暗茶褐色粘質土・暗褐色粘質土である。遺物は土師皿、近江型黒色土器、瓦器、山茶椀等が出土している。

瓦器　全体が確認できる個体は、口径が14.6～15.4cm、器高は6.1～6.4cmを測る。口縁はＢ型で、高台はＡ型、底部はＡ型である。見込みの暗文は複数回転の連結輪状である。近江型黒色土器椀にみられる放射状暗文を施している個体がある。外面はＡ型で密に施す。皿は丸みのある底部で口縁部を丸く収めるプロポーションで、見込みに平行線状、体部外面に横方向に暗文を施す。

その他の土器　土師皿は、口径が8.7～9.6cmを測る小型品で、丸みのある底部を持ち、口縁端部を外反させる。近江型黒色土器の椀は、全体が確認できる個体で口径が15.0～15.4cm、器高が5.5～6.3cmを測る。高台は逆台形のしっかりした高台で内面には放射状、外面には口縁部に横方向、体部には放射状の暗文が認められる。小椀も出土している。山茶椀は断面逆台形のしっかりした高台で、接地面に籾殻痕が認められる。

時期　12世紀前半

◆アリヲヲジ遺跡３トレンチSD01（東近江市：東近江市教委2009）

SD01は調査区の検出された溝で、断面形Ｕ字状を呈し深さ1mを測る。遺物は土師皿、瓦器、山茶椀の椀・捏鉢が出土している。

瓦器　口径が15.0～15.9cm、器高が4.2～5.7cmである。口縁はＢ型、高台はＢ型である。底部はＡ型で、見込みの暗文は複数回転の連結輪状で、外面はＢ型で粗い。

その他の土器　土師皿は口径が９～9.6㎝の小型品で、体部一段ナデ仕上げで、口縁を外反させるもの、端部の断面形が三角形を呈するものがある。山茶椀は椀と捏鉢が出土している。椀は低い逆三角形の高台である。

時期　12世紀中頃から後半

◆野瀬遺跡第5地区SK520（東近江市：蒲生町教委1989）

SK520は一部別の土坑に切られているが、1.25×2.2m、深さは0.6mを測る隅丸長方形の土坑である。底面近くから完形の遺物がまとまって出土している。遺物は土師皿、近江型黒色土器、瓦器が出土している。調査担当者は底面で板材が検出されたことから土坑墓の可能性を指摘している。

瓦器　口径が14.1～15.7㎝、器高が5.2～5.6㎝、口縁はA型、高台はB型、底部B型である。見込みの暗文は複数回転の連結輪状であるが、連結輪状の暗文を施す前に間隔の密な平行線状暗文を施す個体がある。外面は４～５分割の粗いB型である。

その他の土器　近江型黒色土器は口径が14.4～16.2㎝、器高が5.3～6.1㎝で、逆台形のしっかりした高台である。外面の暗文は、口縁部の横ナデに対応する範囲の横方向と高台部を中心に放射状に施している。土師皿は口径が9.1～10.4㎝の小型品と15.2～15.7㎝の大型品がある。体部は一段ナデ仕上げで、口縁端部が外反するものが目立つ。

時期　12世紀後半

◆川合寺遺跡第１次調査第４区第３トレンチSK1（東近江市：八日市市教委1993）

SK1は2.4m×2.1mを測る長方形を呈する土坑で、埋土の下層には炭・焼土が多く含まれている。壁面は焼けていない。遺物は土師皿、近江型黒色土器、瓦器、常滑焼、白磁等が出土している。

瓦器　全体が分かる個体の口径は15.1～15.9㎝、器高は5.3～5.6㎝を測る。高台はB型で、底部はA～C型が認められる。見込みの暗文は２～３回転の連結輪状で、外面はB型で非常に粗い。皿は見込みに平行線状の暗文を施している。

その他の土器　土師皿は口径が９～10㎝の小型品と15～15.6㎝の大型品がある。体部は一段ナデ仕上げで、一部口縁端部が内湾気味に立ち上がるものも認められるが、おおむね外反傾向にある。近江型黒色土器は、全体が分かる個体の口径が14.8～16.0㎝で、器高は5.1～5.4㎝である。内面の暗文は放射状で、外面はミガキが確認できる個体とできない個体がある。常滑焼は、口縁部がやや内湾して立ち上がる捏鉢で、下半部にヘラケズリ調整が認められる。白磁碗は大振りの玉縁を持つ白磁でⅣ-1類に相当する。

時期　12世紀末

◆奥野遺跡第19次１調査区SE1（近江八幡市：近江八幡市教委2016）

SE1は直径2.4m、深さ1.3mを測る井戸で、素掘りであったと判断されている。遺物は近江型黒色土器が主体で、瓦器、青磁、白磁、常滑焼の捏鉢、土師皿が出土している。

瓦器　口径が15㎝前後、器高が5㎝前半である。口縁はB型で、高台はC型である。底部はA型とB型が認められるが、A型であっても高さがほとんどない。見込みの暗文は、複数回転の連結輪状で、外面はD型である。

その他の土器　土師皿は口径が8㎝前半台の小型品と12.6～15.4㎝を測る大型品がある。体部は一段ナデ仕上げである。近江型黒色土器は口径が14㎝台で、器高が４㎝後半台である。高台は断面形が低い逆台形を呈し、底部が接地もしくは下方に突出している個体も確認できる。遺存状態が良くないが、外面の暗文は確認できない。青磁碗はⅠ-3類である。

時期　13世紀前半

④甲賀南部地域

甲賀南部地域は、旧甲賀郡で野洲川の横田の渡し上流域である。甲賀市域の旧町の水口町、甲南町が中心である。この地域は調査事例がほとんどなかったが、ここ数年で比較的まとまって瓦器が出土している遺跡・遺構が確認されている。

【主な遺跡】文殊院遺跡、植遺跡、貴生川遺跡

◆文殊院遺跡（甲賀市：甲南町教委1996）

溝を中心に瓦器が出土している。遺構掘削を行っていない。そのため検出中の遺物が中心で、出土状況は不明である。

瓦器　完形に復元できる個体はない。口径は15㎝台が中心である。口縁部はB型、高台はA・B型、底部がA型である。見込みの暗文は放射状・平行線状もしくは複数回転の連結輪状で、外面はB型である。皿は、暗文が見込み部は平行線状で、体部内面に圏線状に施されるものとないものが確認できる。

その他の土器　土師皿は大小２種類で、大型品は直径が16㎝台、小型品は９㎝台が中心である。体部は一段ナデで仕上げる。また、口縁端部の仕上げもやや外反させるものと丸く収めるものが混在している。信楽焼の甕の口縁部片等も出土していることから、混入も考慮する必要がある。

時期　11世紀末から12世紀前半

◆貴生川遺跡T5-S162（甲賀市：甲賀市教委・協会2017）

S162は1.6m以上×1.4mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは35㎝を測る。３ケ所で完形品の瓦器椀が検出されている。土坑墓の可能性が高い。

瓦器　口径は14㎝後半台から15㎝前半が中心である。口縁部はB型、高台はB型、底部がA型である。見込みの暗文は複数回転の連結輪状で、外面はB型である。

その他の土器　脚台付の土師器の皿の脚部が出土している。

時期　12世紀後半

◆植遺跡第1次調査1トレンチS27（甲賀市:滋教委・協会2005）

S27は直径3.5mの井戸で、深さが2.1mを測る。水溜用に最下層で曲物が検出されている。遺物は瓦器、土師皿が出土している。

瓦器　口径は14㎝後半台が中心である。口縁部はＢ型、高台はＢ・Ｃ型、底部がＢ・Ｃ型である。暗文は２～３回転の連結輪状で、外面はＤ型で、指押さえ痕が明瞭に残るものが多い。皿は内面見込み部分に平行線状の暗文が確認できる。

その他の土器　土師皿は、基本体部一段ナデ仕上げで、口縁端部外面に面を持つものと丸くおさめるものが認められる。近江型黒色土器は全く認められない。

時期　13世紀前半

◆貴生川遺跡T4-S1（甲賀市：甲賀市教委・協会2017）

溝T4-S1は一辺約37mの方形に復元できる屋敷地の区画を構成している溝である。遺物は瓦器、土師皿、白磁、青磁等が出土している。

瓦器　口径が14㎝前後、器高は４㎝前後が中心である。口縁部Ａ型、高台Ｃ型、底部Ｂ・Ｃ型で、見込みの暗文は２～３回転の連結輪状、「ℓ」字状、外面はＤ型で、指押さえ痕が非常に明瞭に残るものが多い。

その他の土器　近江型黒色土器は出土していない。土師皿は大小２種類で、大型品は直径が14㎝～15㎝、小型品は７㎝後半から８㎝前半が中心である。体部は一段ナデ仕上げである。また、口縁端部の仕上げもやや外反させるものと丸く収めるものが混在している。輸入陶磁器はⅣ-2類の白磁碗、Ⅰ-2分類の青磁皿、Ⅰ-5分類の青磁碗、常滑焼の捏鉢、古瀬戸の壺が出土している。

時期　13世紀前半から中頃

５．　各地域の動向（第３～５図）

各地域の動向を形態分類に沿う形で、時期ごとにまとめておきたい。

(1) 湖南南部地域

この地域は、遺跡数が少ないながらも11世紀後半から14世紀前半まで、近江で瓦器が確認できる全期間を通して出土している唯一の地域である。

口縁部形態は、12世紀前半代までＡ型が確認できるが、12世紀代にはいると徐々にＢ型に転換していく。以降はＢ型のみとなる。当然、口縁端部内面に施される沈線も初現期にはやや下方に施されていたものが、口縁部形態変化と期を同じくして上端部に施されるようになる。高台の形態はＡ型でも高いものから低いものに徐々に変化していき、12世紀中頃にはＢ型が主流に、そして12世紀末頃からＣ型に変化していく。この高台の形態は、底部の形態と連動しており、高台がＢ型からＣ型に変化していく段階で、Ｂ型が登場し、13世紀前半代にはＣ型がみられるようになる。見込みの暗文は、11世紀後半の初現期に格子状、放射状、平行線状と多様であったものが、12世紀前半代に平行線状が主体、12世紀中頃には複数回転の連結輪状に変化し、回転数を減じながら13世紀前半代には体部の圏線状の暗文と同化する。外面の暗文はＡ型→Ｂ型→Ｃ型→Ｄ型という流れで変化していく。11世紀後半から12世紀代にＡ型→Ｂ型へと徐々に変化していき、12世紀末から13世紀初頭段階でＢ型→Ｃ型となる。そして13世紀後半代以降にＤ型となる。

口径、器高をみると11～12世紀代には口径を緩やかに小さくしつつ、器高を低くして、13世紀代に口径を急激に縮小していくことが分かる。

皿は、見込みの暗文が11世紀代に放射状や格子状、平行線状と多様であったものが、12世紀以降は平行線状に限定されるようになり、12世紀中頃を境にその間隔が広がっていく。それと歩調をあわせて12世紀中頃以降に体部内面の横方向の暗文を省略していく傾向がみられる。

(2) 湖南北部地域

この地域はあまりまとまった資料が少ないが、ほぼ湖南南部地域と同じ傾向を示している。11世紀代の資料および13世紀後半代以降の資料が欠落しているが、今後、新たな資料により補完される可能性が高いと考えられる。

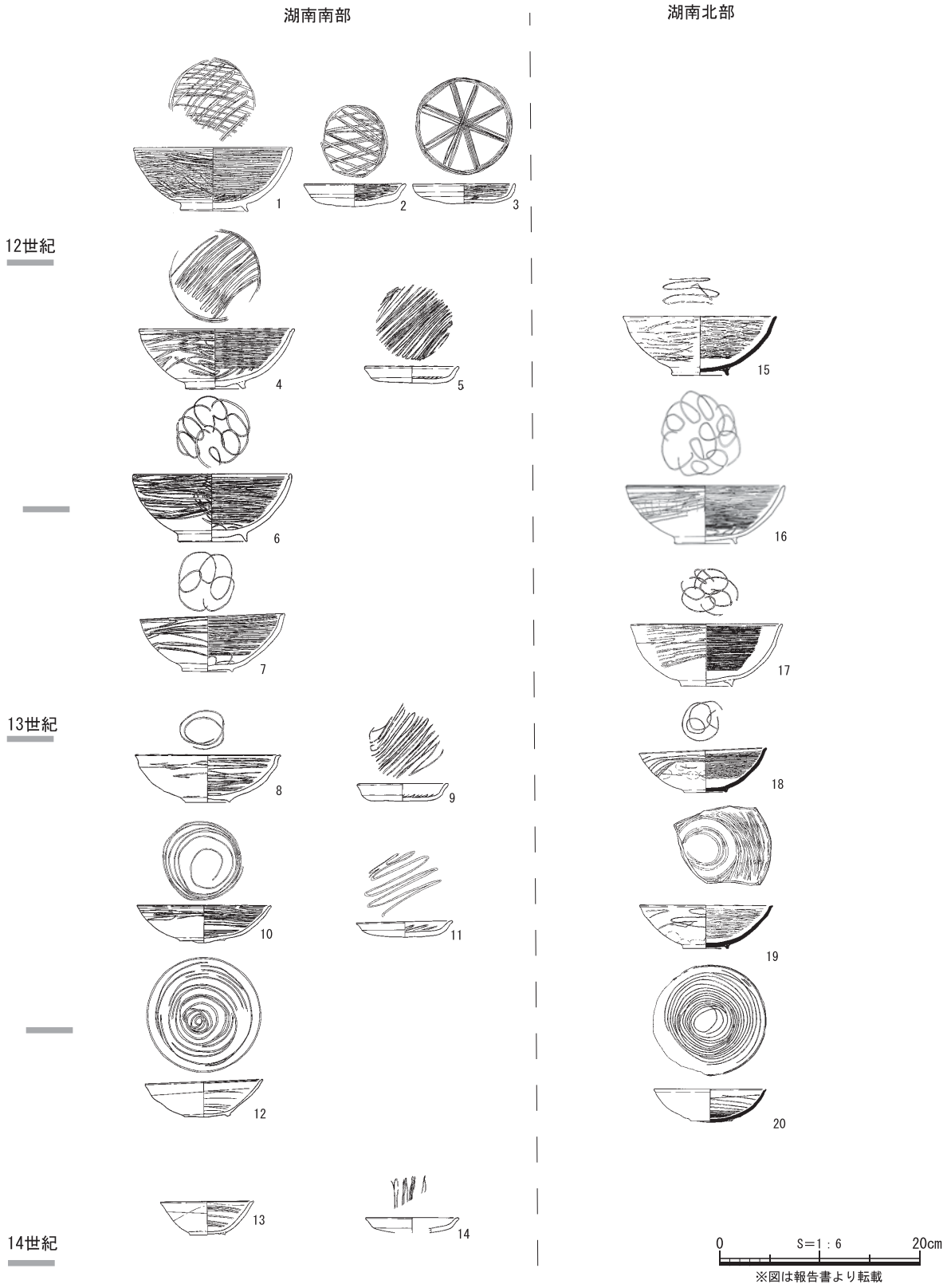
(3) 湖東地域

この地域は南半部の山側地域でまとまった資料が多い。初現は11世紀末頃であるが、それ以降の12世紀前半代と13世紀代のまとまった資料が非常に少ない。そのため形態の変遷は、少ない資料から読み解くしかないのが現状である。

口縁部の形態は、初現期はＡ型で、12世紀前半代でＢ型に変化していくと考えられる。高台は12世紀中頃にＡからＢ型に変化し、12世紀末から13世紀初頭にＢからＣ型に変化する。底部は高台の変化にほぼ同調し、12世紀末から13世紀初めにＡからＢ型に、13世紀代にＢからＣ型に変化すると考えられる。見込みの暗文は11世紀代の初現期には放射状、格子状、放射状と多様であったものが、12世紀前半代には複数回転の連結輪状に変化していく。そして徐々に回転数を減じていき、13世紀前半代には１～２回転程度となる。外面の暗文は、12世紀前半代まではＡ型で、中頃以降Ｂ型に、そして13世紀代になるとＤ型に変化する。

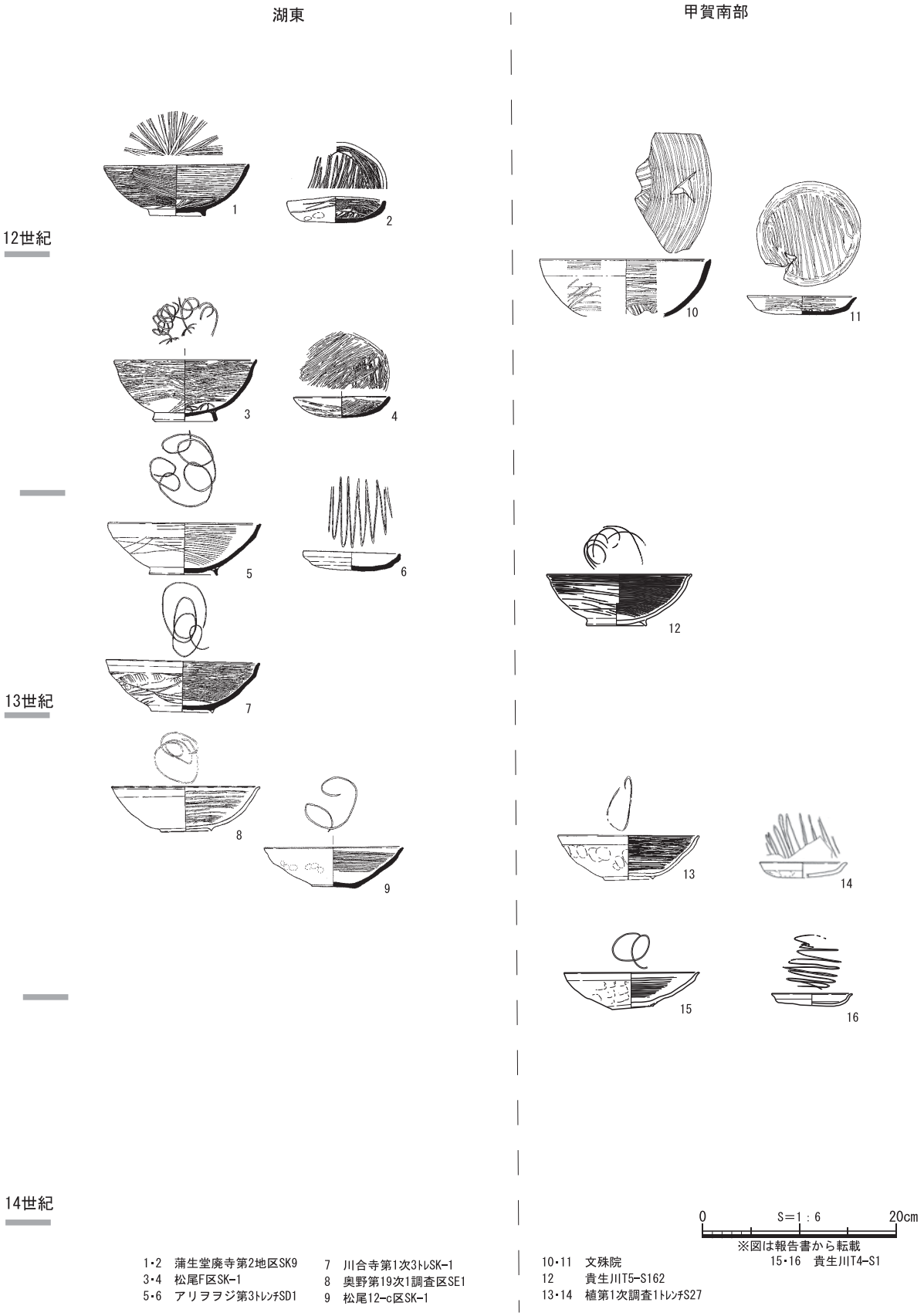
口径、器高からみると11世紀末の初現期には器高が５㎝代であったものが、12世紀代には６㎝代のものがみられ、12世紀後半代にまた５㎝代にもどる現象がみてとれる。13世紀代に器高が急激に低くなる。

皿は、初現期から12世紀代の形態が土師皿と非常に類似していることが特徴である。さらに12世紀前半代以前は、見込みの暗文の形態が一定していない可能性が高い。12世紀中頃以降は平行線状で、時期が新しくなるにつれてその間隔が広がっていく。12世紀中頃以降に体部内面の横方向



1・2・4・6　関津T91-S1中層
3　関津T2-S24
5・7　関津T28-S3
8・9　関津T79-S102
10　関津T112-S47
11・12　大石城2区S34
15　西海道B9区P12
16　中兵庫H7-土坑62
17　柳A区SKA02
18　西海道B9区P4
19　西海道B6e区SK22
20　西海道B9区SD1

第３図　湖南地域の瓦器変遷



1・2　蒲生堂廃寺第2地区SK9
3・4　松尾F区SK-1
5・6　アリヲヲジ第3トレンチSD1
7　川合寺第1次3トレSK-1
8　奥野第19次1調査区SE1
9　松尾12-c区SK-1
10・11　文殊院
12　貴生川T5-S162
13・14　植第1次調査1トレンチS27
15・16　貴生川T4-S1

第４図　湖東・甲賀南部地域の瓦器変遷

の暗文を省略していく傾向がみられる。

(4) 甲賀南部地域

この地域は遺跡数が少なく、時期も連続していないため細かな変遷を確認し難い。初現は11世紀末ごろと考えられるが、資料の出土状況が良好ではなく、共伴する資料も幅があるため、今後の資料の増加をもって再検討する必要がある。ただし、見込みの暗文が放射状であることから少なくとも12世紀前半代の資料であろう。12世紀前半代の資料は確認できないが、後半代は高台・底部がＡ型、見込みの暗文が複数回転の連結輪状で、外面はＢ型である。13世紀以降は見込みの暗文が1～2回転の連結輪状もしくは「ℓ」字状に、そして外面の暗文はＤ型に変化する。それに同調して、高台もＢからＣ型、底部もＢ・Ｃ型が主流となる。

口径、器高からみると11～12世紀代には口径を緩やかに小さくしつつ、器高を低くして、13世紀代に急激に器高を減じていく傾向が分かる。

皿は他地域と同様に平行線状の暗文が主流で、12世紀中頃以降は時期が新しくなるにつれてその間隔が広がっていく。12世紀中頃以降に体部内面の横方向の暗文を省略していく可能性が高い。

６．　近江における瓦器の動向

(1) 地域間の相違点

４地域を概観すると、欠落している時期が散見されるものの、大きな流れとして湖南南部地域と湖南北部地域、湖東地域と甲賀南部地域の状況がそれぞれ非常に似通っていることが分かる。そこで、湖南南北地域と湖東・甲賀南部地域の範囲を広げた２地域を軸にしてその違いを明らかにしていきたい。

この２地域の大きな違いは、初現期と13世紀以降に現れる。初現期は、ともに11世紀後半から末にかけてであるが、法量とくに器高の点で大きくことなる。それは湖南南北地域では６㎝台であるが、湖東・甲賀南部地域では５㎝台で、湖南南北地域は以降徐々に低くなっていく。湖東・甲賀南部地域は12世紀前半にいったん高くなり、後半になると初現期と同じ高さに戻る変化がみられる。

13世紀以降の違いは、法量の変化、暗文の施文方法にみられる。法量の変化は、湖南南北地域が口径を急激に減じていくのに対し、湖東・甲賀南部地域は、口径の縮小よりも器高の低下が著しい。その結果、湖南南北地域では半球状の杯のような形態に、湖東・甲賀南部地域は扁平な皿状の形態を示すようになる。暗文は、見込み・外面で違いがある。見込みは、湖南南北地域で体部内面の圏線状の暗文と同化していくのに対し、湖東・甲賀南部地域は連結輪状の回転数を１～２回転と減じ、最小回転の「ℓ」字状を呈するように変化する。また、外面の暗文においては、湖南南北地域がＣ型→Ｄ型と変化していくのに対し、湖東・甲賀南部地域は12世紀代にＢ型であったものが、13世紀代にはＤ型へと、密から疎への段階的な省略ではなく急激に暗文を省略してしまう。

このように、初現期および13世紀代に生じている２地域間の大きな違いを明らかにすることができた。それでは、２地域における相違点の発現事由について言及しておきたい。

(2)「大和型」と「近江型」の瓦器

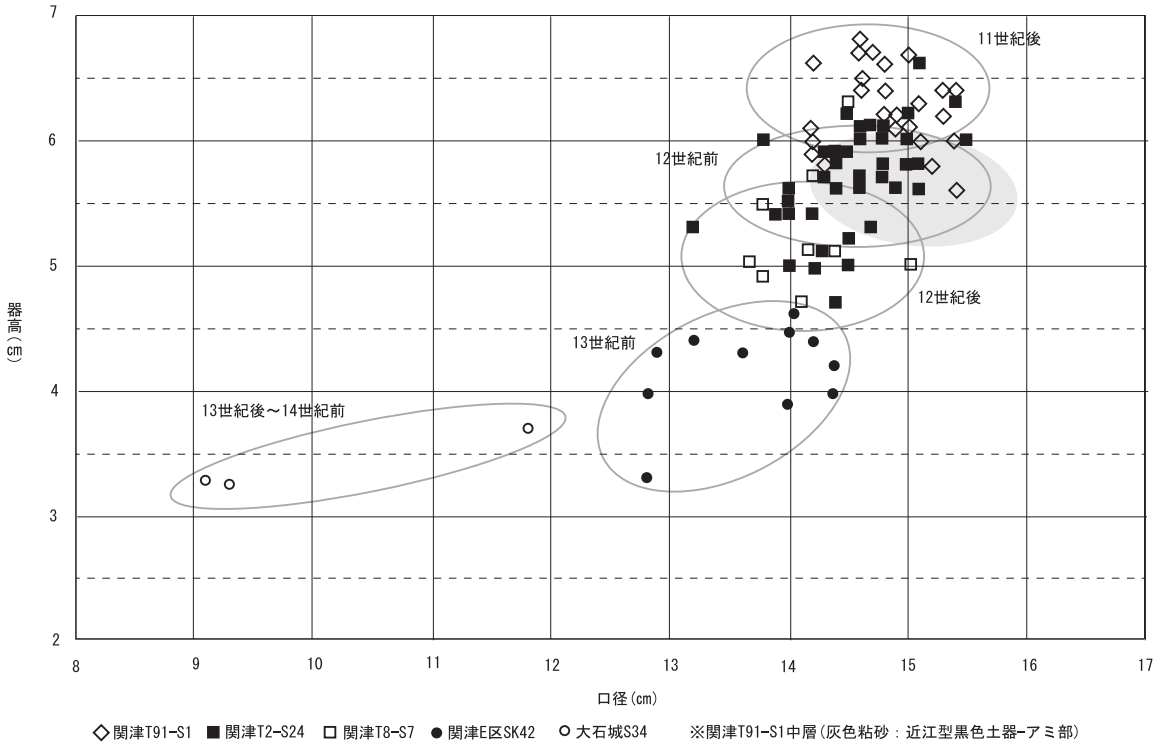
まず、湖南南北地域の瓦器の変遷は、ほぼ大和型の瓦器の変遷過程（川越1983・近江1991）をトレースしているといえる。11世紀の後半代に大和型瓦器が、ちょうど南山城・大和からの玄関口にあたる湖南南部地域に登場し、その後の変化の方向性は大和型そのものである。それは、情報だけではなく、瓦器そのものが直接搬入されている可能性が高いことが考えられる。

一方、湖東・甲賀南部地域は、初現が11世紀末とやや湖南南部地域に遅れるものの、大和型の瓦器の範疇で理解できる資料である。ただし、この初現の蒲生堂廃寺跡SK9出土資料は、すでに指摘されているように大和型の影響は間違いなくみられるものの相違点が示されている。この資料の成立については、近江型黒色土器製作との関係が指摘されている（日永1985・森1992）。湖東地域の瓦器生産が黒色土器工人の関与のもと行われたとしたのである。筆者もこの意見に同意する立場で、蒲生堂廃寺跡SK9出土資料の法量が、同時期の大和型瓦器よりも近江型黒色土器に相似形であることが大きな理由である（第５図）。そして、在地生産の試みは12世紀前半代の資料が非常に少ないことから継続されなかったと推測できる。12世紀前半代の資料として提示した松尾遺跡F区SK1の出土品も、同時期の大和型瓦器よりも近江型黒色土器に法量が近いこと、出土している瓦器に近江型黒色土器特有の内面の放射状の暗文を施した個体が確認できることからも、近江型黒色土器との関係が裏付けられるだろう。つまり、「近江型」瓦器と呼べるものは12世紀前半代までで、12世紀中頃以降は「大和型」瓦器として理解すべきであろう(7)。

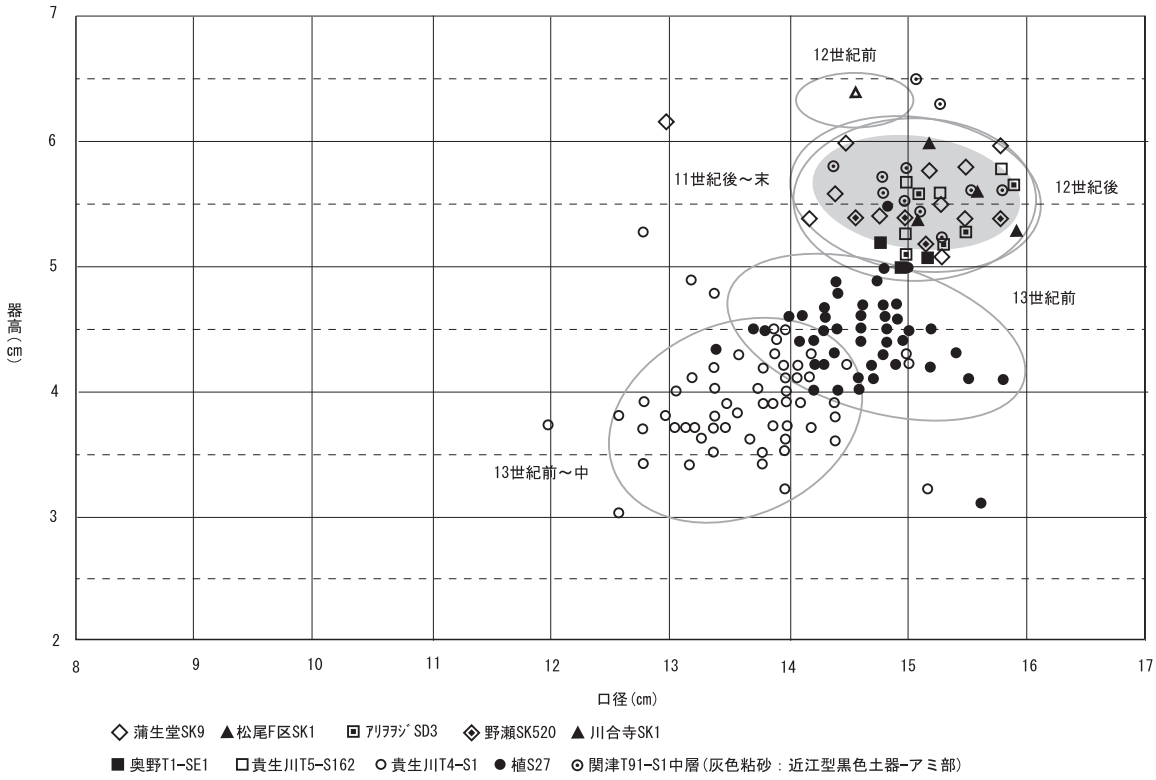
(3)「大和型」から「伊賀型」へ

湖南南北地域が大和型瓦器の変遷をトレースしていること、そして初現期の相違点は地元産ともいうべき「近江型」の成立で説明できることはすでに述べた。では、13世紀代の相違点はどうであろう。外面の暗文の早期省略、見込みの暗文形態、そして法量変化の方向性の違いであるが、これは東海道ルートでつながりのある伊賀地域との関係で理解できる。大和型瓦器の影響で成立し、13世紀以降独自の変化を示す「伊賀型」（山田1986･福田2006）の特徴と合致するのである。

そのように考えると湖東・甲賀南部地域は、初現期は大



湖南南北地域出土瓦器の法量分布



湖東・甲賀南部地域出土瓦器の法量分布

第５図　近江における瓦器の法量分布

和型瓦器をモデルとしながら近江型黒色土器工人の影響で成立する「近江型」ではじまるが継続せず、12世紀中頃以降は「大和型」を主流とし、13世紀になると直接の「大和型」ではなく傍流の「伊賀型」が主流となっていくと考えられる(8)。

7．おわりに

①近江における瓦器の分布について再整理し、各地域の動向をチェックすること、②近江における瓦器の変遷を整理し、「近江型」の再評価をおこなうことを本論の大きな目的とした。

①に関しては、イメージで理解されていた近江における瓦器の動向を可視化することができた。それにより、近江においては、大きな意味で「大和型」の影響下にあるといえるが、地域ごとにみていくと「大和型」の影響に濃淡があることがわかった。

②については、「大和型」の影響下で行なわれた在地産の瓦器製作の試行品であると推察した。それは「大和型」＋「近江型黒色土器」といった性格をもつものである。しかし、それも継続しなかったと考えられる。湖南南部地域（関津遺跡）で11世紀後半代に「大和型」瓦器と近江型黒色土器が共伴するものの、12世紀に入ると「大和型」瓦器一色になるのとは対照的である。とくに「近江型」瓦器の発現地である湖東地域の山側は、当時の幹線道路であった東山道・東海道からも距離があり、瓦器の入手が困難であったことと、近江型黒色土器の製作域に隣接していることが背景にあったと考えられる。その点でも大和地域の玄関口という交通の重要な地点である湖南南部地域とは地勢的に大きく異なるのである。

そのように考えると瓦器の分布は、流通路と密接に関連していると考えられる。すでに指摘されていることであるが（森1992）、湖南北部地域でも瓦器が主体となる地域は、東海道と東山道との分岐点周辺である。また、近江型黒色土器が主体ではあるが一定量の瓦器を保有する遺跡は、矢橋港など湖上交通の要所にアクセスするルート上に集中していることは非常に示唆に富んでいるだろう。そのように考えると瓦器を含めた当該時期の供膳具（近江型黒色土器・山茶椀）の動向を把握することにより、当該時期の流通システムを解明する手段となりうるだろう。そして、結果、さまざまな供膳具の選択が可能な近江という地域の特性をあぶりだすことができると考えている。

本論では近江における大きな流れを把握することに主眼をおいたため、個体単位で大きな流れから外れるもの、つまり在地産についてはほとんど言及していない。しかし、森氏が指摘しているとおり存在していることも確かであり（森1992）、土器生産と流通を考えるうえでは重要な点であることは間違いがない。今後の課題としておきたい。

謝辞

遺物の実見にあたり、東近江市埋蔵文化財センターの西邦和氏・明日一史氏にはお世話になった。また、本論を執筆するにあたり、國下多美樹氏・木許守氏・辻川哲朗氏・畑中英二氏には様々なご教示をいただいた。非常に感謝している次第である。文末であるが御礼を申し上げたい。

註

(1)瓦器の内外面に施される暗文については、「ミガキ」「磨き」「暗文ミガキ」等の用語が使われているが、ここではヘラ状工具による器表面を磨く行為を「暗文」として使用する。

(2)「近江型黒色土器」とは森隆氏が整理している概念に準じて使用する（森1986）

(3)ここで使用する「湖西」＝高島市域、「湖南」＝大津・草津・守山・栗東・野洲・甲賀市域、「湖東」＝近江八幡・東近江・日野町・愛荘町・甲良町・豊郷町・多賀町・彦根市域、「湖北」＝長浜市域を指す用語である。

(4)調査担当者の横田洋三氏にご教示いただいた。

(5)県＝滋賀県、協会＝財団法人・公益財団法人滋賀県文化財保護協会、教委＝教育委員会

(6)時期区分については遺構の性格にもよるが、世紀の後に「初め」「前半」「中頃」「後半」「末」をつけて表現している。具体的な時期はおおむね「初め」は第１四半期、「前半」は第１・２四半期、「中頃」は第２・３四半期、「後半」は第３・４四半期、「末」は第４四半期をイメージしている。よって、「中頃から後半」は第２～４四半期となる。

(7)ここで使用する「大和型」は搬入品およびそれを忠実に模倣した在地産も包括する用語として使用している。

(8)ここで使用する「伊賀型」も「大和型」同様に搬入品およびそれを忠実に模倣した在地産も包括する用語として使用している。

参考文献（著者名・機関名50音順，刊行年順）

【報告書】

近江八幡市教育委員会(2016)「奥野遺跡第19次調査」『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書44』

草津市教育委員会(2008)『柳遺跡発掘調査報告書Ⅱ』草津市文化財調査報告67

草津市教育委員会(2013)『西海道遺跡・笠寺廃寺・南笠古墳群発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書95

蒲生町教育委員会(1989)「蒲生堂廃寺」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

蒲生町教育委員会(1989)「野瀬遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

甲南町教育委員会(1996)『平成５・６・７年度甲南町内遺跡発掘調査報告書』甲南町文化財調査報告第2集

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2001)『中兵庫遺跡』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2005)『植遺

跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2007)『関津遺跡Ⅰ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2008)『関津遺跡』
滋賀県教育委員会･財団法人滋賀県文化財保護協会(2010)『関津遺跡Ⅱ』
滋賀県教育委員会･財団法人滋賀県文化財保護協会(2011)『関津遺跡Ⅲ』
滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2016)『大石城遺跡』
東近江市教育委員会(2009)「アリヲヲジ遺跡」『東近江市埋蔵文化財調査報告書』第11集
日野町教育委員会(2001)「日野中部土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告　松尾遺跡」『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第15集
八日市市教育委員会(1993)『川合寺遺跡発掘調査報告書』八日市市文化財調査報告(12)
甲賀市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2017)『貴生川遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第29集

【論文等】

石井清司・引原茂治・伊野近富(1985)「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37号
稲垣晋也(1961)「法隆寺出土の瓦器椀―瓦器椀編年試論―」『大和文化研究』第６巻第４号
稲垣晋也(1967)「瓦器椀の成立と展開―奈良時代黒色土器工人から室町時代火鉢座への系譜―」『日本歴史考古学論叢』2
近江俊秀(1991)「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号
近江俊秀(1992)「畿内産瓦器椀に関する若干の考察―大和地方出土資料を中心として―」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ
近江俊秀・森島康雄(1995)「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
尾上実(1983)「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』
川越俊一(1983)「大和出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
北川浩(1985)「蒲生堂廃寺跡土壙８・９出土の瓦器について―近江地方における瓦器生産に関連して―」『滋賀考古学論叢』第２集
甲賀市(2012)『甲賀市史第２巻　甲賀衆の中世』
小森俊寛・上村憲章(1996)「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所
小森俊寛(2005)『京都から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
渋谷高秀(1985)「紀伊の中世土器」『中近世土器の基礎研究』
白石太一郎(1969)「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』第54号
白石太一郎(1977)「『瓦器』の生産に関する二・三の覚え書」『古代文化』第27巻第１号
菅原正明(1983)「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
辻川哲朗(2012)「遺物と遺構の検討」『岩瀬谷古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
橋本久和(1980)『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第13冊　高槻市教育委員会
中島和彦・佐藤亜聖(2014)「南都出土中近世土器資料集」『奈良市埋蔵文化財センター資料№５』 奈良市教育員会
畑中英二(1997)「近江産黒色土器生産の問題点」『三堂遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
日永伊久男(1985)「近江湖東地方における黒色土器について」『滋賀考古学論叢』第２集
福田典明(2006)「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究ＸＸ』
藤岡英礼ほか(2005)『むらのうつりかわり―栗太郡の中世集落を中心に―』 栗東歴史民俗博物館・財団法人栗東市文化体育振興事業団
森隆(1986)「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』
森隆(1992)「近江出土の瓦器椀に関する若干の検討」『大和の中世土器Ⅱ』
森隆(1993)「土器椀の生産と流通」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』
森島康雄(1992)「畿内産瓦器椀の併行関係と歴年代」『大和の中世土器Ⅱ』
山田猛(1986)「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　中世土器研究会
森島康雄(1995)「6. 瓦器椀（2）分類」『概説中世土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
松本洋明(1992)「瓦器の変質と問題―大和型瓦器を中心として―」『大和の中世土器Ⅱ』 大和古中近研究会
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』 九州歴史資料館

（ほり　まさと：調査課　主任）

表１　瓦器出土遺跡一覧表

●瓦器主体　○近江型黒色土器主体

No.	遺跡名	所在地		点数		文献
1	大石城	大津市	大石龍門	20以上	●	1
2	関津	大津市	関津	20以上	●	2
				20以上	●	3
				20以上	●	4
				20以上	●	5
				5	●	6
3	浮御堂	大津市		20以上	○	7
4	延暦寺東塔	大津市		4	●	8
5	近江国府	大津市	大江	1	●	9
6	大谷	大津市	滋賀里	2	○	10
7	上田上	大津市	上田上牧町	14	●	11
8	唐橋	大津市	瀬田橋本町	2	●	12
9	坂本里坊	大津市	坂本	2	●	13
10	菅池	大津市	大江	18	○	14
				3	○	15
11	惣山	大津市	大江	1	○	16
12	螢谷	大津市	石山	4	○	17
13	東光寺	大津市	大萱	3	●	18
14	南志賀	大津市	南志賀町	2	●	19
15	上笠	草津市	上笠町	12	○	20
16	北萱	草津市	北萱	3	○	21
				20以上	●	22
				1	●	23
17	新堂前	草津市	駒井沢町	1	○	24
18	宝光寺跡	草津市	北萱	5	○	25
19	谷	草津市	西矢倉	1	○	26
20	中畑	草津市	矢倉・西矢倉	7	○	27
				17	○	28
				2	●	29
				4	●	30
21	中兵庫	草津市	北山田・山田町	10	●	31
				2	●	32
				20以上	○	33
22	西海道	草津市	南笠町	20以上	●	34
23	野路岡田	草津市	野路町	20以上	●	35
				20以上	●	36
24	馬場	草津市	下笠町	20以上	○	37
25	襖	草津市	御倉	4	○	38
26	宮前	草津市	川原町	1	○	39
				20以上	○	40
27	矢倉口	草津市	矢倉町	20以上	●	41
28	柳	草津市	青地町	9	○	42
				11	○	43
				4	○	44
29	岩畑	栗東市	高野	1	○	45
30	岡	栗東市	岡	1	●	46
31	狐塚	栗東市	川辺	1	○	47
32	下鈎	栗東市	下鈎	1	●	48
33	高野	栗東市	高野	1	○	49
				2	○	50
34	多福寺	栗東市	林	2	○	51
35	辻越B	栗東市	御園	1	○	52
36	手原	栗東市	手原	1	●	53
37	中村	栗東市	御園・上砥山	5	○	54
38	林	栗東市	林	10	○	55
39	綣	栗東市	北中小路・綣	1	○	56
				1	○	57
40	赤野井	守山市	赤野井町	4	○	58
41	伊勢	守山市	伊勢町	1	○	59
42	小津浜	守山市	山賀町	3	○	60
43	勝部西浦	守山市	勝部町	1	●	61
44	下長	守山市	大門町	1	○	62
45	塚之越遺跡	守山市	古高町	1	○	63
46	長塚	守山市	小島町	8	○	64
47	欲賀南	守山市	欲賀町	1	○	65
48	横江	守山市	横江町	1	○	66
				7	○	67
49	大篠原東	野洲市	大篠原	1	○	68
50	街道	野洲市	大篠原	1	○	69
				1	○	70
				6	○	71
51	小篠原	野洲市	小篠原	1	○	72
52	北桜東	野洲市	北桜	1	○	73
53	西田井	野洲市	三上	2	○	74
54	三上	野洲市	三上	3	○	75
55	吉地薬師堂	野洲市	中主町六条	1	○	76
56	木部	野洲市	中主町木部	1	○	77
57	光明寺	野洲市	中主町西河原	1	○	78
				4	○	79
				1	○	80
				1	○	81
58	比留田	野洲市	中主町比留田	1	○	82
59	八夫	野洲市	中主町八夫	3	○	83
60	吉地大寺	野洲市	中主町吉地	3	○	84
61	芦刈	近江八幡市	安土町下豊浦	3	○	85
62	安土城下町	近江八幡市	聖霊焼地区	15	●	86
			十七地区	1	●	87
			十七地区	1	●	88
			西法寺地区	1	●	89
			十七地区	1	●	90
63	後川	近江八幡市	杉ノ森町	7	○	91
				8	○	92
64	大手前	近江八幡市	野田町	7	○	93

No.	遺跡名	所在地		点数		文献
65	奥嶋館	近江八幡市	島町	1	○	94
66	奥野	近江八幡市	中小森町	3	○	95
69	上豊浦宗円堂	近江八幡市	安土町上豊浦	1	○	98
70	観音堂	近江八幡市	千僧供町	1	○	99
71	蔵ノ町	近江八幡市	上田町	6	○	100
72	御所内	近江八幡市	御所内町	1	○	101
73	金剛寺	近江八幡市	金剛寺町	4	○	102
				2	○	103
74	里井B	近江八幡市	十王町	3	○	104
75	慈恩寺	近江八幡市	慈恩寺町	2	●	105
76	高木	近江八幡市	長田町	1	○	106
				1	○	107
77	内堀	東近江市	旧八日市市上羽田	13	○	108
78	金貝	東近江市	旧八日市野村町	1	○	109
79	上日吉	東近江市	旧八日市市建部北町	4	○	110
80	川合寺	東近江市	旧八日市市川合町	5	○	111
				20以上	○	112
81	瓦屋寺ｶﾏｴ	東近江市	旧八日市市建部瓦屋寺	2	○	113
82	駒額	東近江市	旧八日市市平石	1	●	114
83	建部城	東近江市	旧八日市市建部上中町	13	○	115
84	日吉・吉住池	東近江市	旧八日市市建部日吉町	1	○	116
85	福応寺	東近江市	旧八日市市土器町	16	●	117
86	下羽田	東近江市	旧八日市上平木町	1	○	118
				2	●	119
87	永田	東近江市	旧八日市市上羽田町	4	○	120
88	野村北	東近江市	旧八日市市野村町	6	○	121
89	木村古墳群	東近江市	旧蒲生町木村	4	●	122
	木村古墳群	東近江市	旧蒲生町木村	1	●	123
90	麻生	東近江市	旧蒲生町麻生	20以上	●	124
91	市子	東近江市	旧蒲生町市子	10	●	125
92	田井・杉ノ木	東近江市	旧蒲生町田井	6	●	126
93	野瀬	東近江市	旧蒲生町宮井	20以上	●	127
94	蒲生堂廃寺	東近江市	旧蒲生町蒲生堂	20以上	●	128
95	アリヲヲジ	東近江市	旧蒲生町蒲生堂	16	●	129
96	堂田	東近江市	旧蒲生町河原	20以上	●	130
97	上山神社	東近江市	旧能登川町山路	2	○	131
98	地蔵	東近江市	旧能登川町躰光寺	3	○	132
99	横受	東近江市	旧能登川町佐生	1	○	133
				1	○	134
100	竜田	東近江市	旧五箇荘町竜田	1	○	135
101	堂田	東近江市	旧五箇荘町石塚	1	○	136
				5	○	137
102	市	愛荘町	市	2	○	138
103	法養寺	甲良町	横関	2	●	139
104	国領	彦根市	田附町	16	○	140
105	多景島	彦根市	八坂町	2	●	141
106	蛭目	彦根市	清崎町	2	●	142
107	宮司	長浜市	宮司町	2	●	143
108	北黄瀬	甲賀市	信楽町黄瀬	9	●	144
109	北脇	甲賀市	水口町北脇	1	●	145
				5	●	146
110	古門	甲賀市	甲南町杉谷	2	●	147
111	最勝寺境内	甲賀市	水口町岩坂	20以上	●	148
112	沢尻	甲賀市	甲南町竜法師	13	●	149
113	下川原	甲賀市	水口町泉	7	●	150
				6	●	151
114	宮町	甲賀市	信楽町宮町	2	●	152
115	文殊院	甲賀市	甲南町池田	20以上	●	153
116	矢川寺	甲賀市	甲南町森尻	1	●	154
				5	●	155
117	畦ノ平	甲賀市	甲南町新治	3	●	156
118	植	甲賀市	水口町植	20以上	●	157
119	貴生川	甲賀市	水口町貴生川	20以上	●	158
120	竹石	甲賀市	水口町三大寺	4	●	159
121	馬川	甲賀市	甲南町馬川	6	●	160
122	六反古墳	湖南市	西寺	2	○	161
123	井戸	湖南市	針	1	●	162
124	岩瀬谷古墳群	湖南市	正福寺	7	●	163
125	夏見城	湖南市	夏見	16	●	164
126	了安寺	湖南市	夏見	8	●	165
				7	●	166
127	針氏城	湖南市	針	2	●	167
				19	●	168
128	内池	日野町	内池	12	○	169
				1	○	170
				3	●	171
129	北代	日野町	北代	4	●	172
				1	○	173
130	五斗井	日野町	河原	27	●	174
				11	●	175
131	小御門城跡	日野町	小御門	4	●	176
				6	●	177
132	十禅師	日野町	日田	20以上	●	178
				20以上	●	179
133	浄土寺	日野町	河原	7	●	180
				1	○	181
134	中甲津	日野町	西大路	5	●	182
				7	●	183
135	西中道	日野町	村井	1	●	184
				1	●	185
136	野瀬	日野町	宮井	1	●	186
137	野田道	日野町	寺尻	1	●	187
138	播沢	日野町	中坪	3	●	188

No.	遺跡名	所在地		点数		文献
138	播沢	日野町	中坪	5	●	189
139	風呂流	日野町	寺尻	1	●	190
				16	●	193
				8	●	194
				24	○	195
				1	●	196
				2	●	197
				5	●	198
141	宮ノ前	日野町	石原	6	●	199

No.	遺跡名	所在地		点数		文献
141	宮ノ前	日野町	石原	1	●	200
142	川守	竜王町	川守	7	●	201
				1	●	202
143	山副氏館	竜王町	薬師	3	●	203
144	下五反田	高島市	安曇川町田中	6	○	204
				2	○	205
145	正伝寺南	高島市	新旭町霜降	2	○	206
146	中ノ坊	高島市	高島	3	○	207

●瓦器主体　○近江型黒色土器主体

【表１関連文献一覧】

1. 県教委・協会（2016）『大石城遺跡』
2. 県教委・協会（2007）『関津遺跡Ⅰ』
3. 県教委・協会（2010）『関津遺跡Ⅱ』
4. 県教委・協会（2011）『関津遺跡Ⅲ』
5. 県教委・協会（2007）『関津遺跡』
6. 大津市教委（2010）『関津遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（51）
7. 県教委・協会（2008）『琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡』　琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書8
8. 延暦寺（2009）『延暦寺防災施設工事・発掘調査報告書』
9. 大津市教委（2011）『近江国府跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（56）
10. 大津市教委（1994）『大谷遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（25）
11. 県教委・協会（1998）『上田上牧遺跡』
12. 県教委・協会（1992）『唐橋遺跡』
13. 県教委・協会（1982）『延暦寺発掘調査報告書Ⅲ』
14. 大津市教委（1986）『近江国府関連遺跡発掘調査報告書』　大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
15. 大津市教委（2013）『近江国府・菅池遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（71）
16. 大津市教委（2012）『惣山遺跡・近江国府跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（60）
17. 県教委・協会（1992）『螢谷遺跡・石山遺跡』
18. 協会（1988）「大津市東光寺遺跡発掘調査略報（1）」『滋賀文化財だより№131』
19. 大津市教委（2013）『南志賀遺跡発掘調査報告書Ⅴ』大津市埋蔵文化財発掘調査報告書（72）
20. 草津市教委（2014）『上笠遺跡第16次発掘調査報告書』　草津市文化財調査報告書104
21. 草津市教委（1990）『北萱・穴村遺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書17
22. 県教委・協会（1994）『北萱遺跡発掘調査報告書』
23. 県教委・協会（2013）『琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12
24. 草津市教委（2009）『新堂前遺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書73
25. 草津市教委（1987）『宝光寺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書12
26. 草津市教委（2001）『谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ』草津市文化財調査報告書43
27. 草津市教委（2002）『中畑遺跡発掘調査報告書Ⅰ』草津市文化財調査報告書47
28. 草津市教委（2012）『中畑遺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書89
29. 県教委・協会（2005）『中畑遺跡Ⅱ』
30. 県教委・協会（2002）『中畑遺跡Ⅰ』
31. 県教委・協会（1997）『中兵庫遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書24-11
32. 県教委・協会（1997）『中兵庫遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書24-12
33. 県教委・協会（2001）『中兵庫遺跡』
34. 草津市教委（2013）『西海道遺跡・笠寺廃寺・南笠古墳群発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書95
35. 草津市教委（2008）『野路岡田遺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書68
36. 草津市教委（1982）『野路岡田遺跡発掘調査報告』草津市文化財調査報告書6
37. 草津市教委（1994）『下ノ笠堂跡・馬場・上笠遺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書22
38. 草津市教委（2000）『襖遺跡発掘調査報告書１』草津市文化財調査報告書37
39. 草津市教委（2014）『宮前遺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書97
40. 県教委・協会（2004）『宮前遺跡』
41. 県教委・協会（1987）『矢倉口遺跡発掘調査報告書』
42. 草津市教委（2008）『柳遺跡発掘調査報告書Ⅱ』草津市文化財調査報告書67
43、草津市教委（2007）『柳遺跡発掘調査報告書Ⅰ』草津市文化財調査報告書64
44. 県教委・協会（2006）『柳遺跡Ⅲ』
45. 栗東町教委・栗文体振（2001）『1984年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
46. 県教委・協会（2016）『岡遺跡』
47. 栗東町教委・栗文体振（2008）『1988年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
48. 栗東町教委・栗文体振（2009）『1989年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
49. 栗東町教委・栗文体振（2000）『1983年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
50. 栗東町教委・栗文体振（2008）『高野遺跡発掘調査報告書　』栗東市文化財調査報告書第15冊
51. 栗東町教委・栗文体振（2009）『多福寺遺跡』栗東市文化財調査報告書第18冊
52. 栗東町教委・栗文体振（2001）『1984年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
53. 栗東町教委・栗文体振（2008）『2006年度年報』
54. 栗東町教委・栗文体振（2009）『1989年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
55、栗東市教委・栗文体振（2010）『林遺跡発掘調査報告書』
56. 栗東町教委・栗文体振（2011）『絶遺跡発掘調査報告書』　栗東市文化財調査報告書第40冊
57. 栗東町教委・栗文体振（2008）『1988年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
58. 県教委・協会（1981）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書8-5』
59. 守山市教委（1986）『守山市文化財調査報告第20冊』
60. 県教委・協会（2002）『小津浜遺跡』
61. 守山市教委（2006）『勝部西浦遺跡発掘調査報告書』
62. 県教委・協会（2015）『下長遺跡・横江遺跡・大門遺跡』
63. 守山市教委（1992）『守山市文化財調査報告書第45冊』
64. 守山市教委（1985）『長塚遺跡発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書第18冊
65. 守山市教委（2009）『欲賀南遺跡第4次発掘調査報告書』
66. 県教委・協会（1990）『横江遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
67. 県教委・協会（1987）『横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
68. 野洲町教委（2002）『大篠原東遺跡発掘調査概要報告』
69. 野洲町教委（1991）『平成2年度　野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町文化財資料集1991-2
70. 野洲町教委（1994）『平成5年度　野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町文化財資料集1994-1
71. 野洲町教委（1988）『街道遺跡発掘調査報告書Ⅰ』野洲町文化財資料集1988-1
72. 野洲町教委（1982）『三堂・野々宮他発掘調査概要報告書』野洲町文化財資料集1981-1
73. 野洲町教委（1983）『三堂・野々宮他発掘調査概要報告書』野洲町文化財資料集1982-2
74. 野洲町教委（2005）『1987年　埋蔵文化財年報』
75. 野洲町教委（1990）『平成元年度　野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町文化財資料集1990-3
76. 中主町教委（1993）『平成4年度　中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ』中主町文化財調査報告書第38集
77. 中主町教委（1993）『県道野洲中主線関連遺跡発掘調査報告書』中主町文化財調査報告書第37集
78. 中主町教委（1985）『光明寺遺跡　第7次発掘調査報告書　　中主町文化財調査報告書第4集
79　中主町教委（1992）『平成2年度　中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第35集
80. 中主町教委（2003）『平成13年度　中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第64集
81. 中主町教委（1990）『中主町土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
82. 中主町教委（1990）『昭和63年　中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第24集
83. 中主町教委（2000）『八夫遺跡第9次発掘調査報告書　　中主町文化財調査報告書第59集

84. 中主町教委（1984）『中主町文化財調査報告書第2集』
85. 県教委・協会（2005）『芦刈遺跡・大中の湖南遺跡』
86. 安土町教委（1988）『緊急発掘調査概要報告書1～6』
87. 近江八幡市教委（2011）『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書44』
88. 近江八幡市教委（2011）『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書44』
89. 近江八幡市教委（2011）『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書44』
90. 安土町教委（2003）『緊急発掘調査概要報告書　平成13年度』安土町埋蔵文化財調査報告書第39集
91. 県教委・協会（1991）『金剛寺・後川遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書18-7
92. 県教委・協会（1989）『高木遺跡　後川遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書17-6
93. 県教委・協会（1989）『大手前遺跡・上下遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書17-7
94. 近江八幡市教委（1988）『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ』
95. 近江八幡市教委（2011）『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書44』
96. 県教委・協会（1986）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書13-2』
97. 県教委・協会（1989）『上下遺跡・常衛遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書17-8
98. 安土町教委（1980）『上豊浦宗円堂遺跡発掘調査報告書』
99. 県教委・協会（1987）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書14-4』
100. 県教委・協会（1987）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書14-4』
101. 県教委・協会（1996）『御所内遺跡・上出B遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書23-6
102. 県教委・協会（1996）『金剛寺遺跡・後川遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書23-8
103. 県教委・協会（1987）『金剛寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
104. 県教委・協会（2005）『里井B遺跡』
105. 県教委・協会（1982）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書10-1』
106. 県教委・協会（1993）『高木遺跡　高木・後川遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書20-10
107. 県教委・協会（1989）『高木遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書16-2
108. 八日市市教委（1983）『内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』八日市市文化財調査報告書（2）
109. 県教委・協会（2011）『金貝遺跡』
110. 県教委・協会（2000）『上日吉古墳群・浅前遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書27-2
111. 八日市市教委（1993）『川合寺遺跡発掘調査報告書』八日市市文化財調査報告書（12）
112. 県教委・協会（2001）『川合寺遺跡・建部下野遺跡』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書28-1
113. 八日市市教委（1981）『上日吉南遺跡・瓦屋寺カマエ遺跡発掘調査報告書』八日市市文化財調査報告書（1）
114. 八日市市教委（1985）『昭和58年埋蔵文化財発掘調査報告書』八日市市文化財調査報告書（6）
115. 県教委・協会（1997）『建部城遺跡発掘調査報告書』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書24-9
116. 県教委・協会（1984）『日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書』県営かんがい排水事業関連発掘調査報告書Ⅱ-2
117. 県教委・協会（1980）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ-1』
118. 県教委・協会（1979）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書7-2』
163. 県教委・協会（2012）『岩瀬谷古墳群』
164. 県教委・協会（2011）『夏見城遺跡』
165. 県教委・協会（2007）『了安寺遺跡』県営かんがい排水事業関連発掘調査報告書19
166. 県教委・協会（2007）『了安寺遺跡・尊光寺遺跡』
167. 県教委・協会（2011）『針氏城遺跡、井戸遺跡その1・2』
168. 県教委・協会（2012）『針氏城2』県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書39-1
169. 日野町教委（1997）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告　内池遺跡・北代遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
170. 日野町教委（1986）『昭和58年年報　松尾遺跡・内池遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
171. 県教委・協会（1982）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書9-3』
172. 日野町教委（2005）『播沢遺跡・野辺遺跡・松尾遺跡・北代遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
173. 日野町教委（1997）『県営かんがい排水事業関係遺跡発掘調査報告　北代遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
174. 日野町教委（2004）『日野中部土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告　松尾遺跡・五斗井遺跡・西中道遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
175. 県教委・協会（1993）『普光寺遺跡・五斗井遺跡』
176. 日野町教委（1991）『県営かんがい排水事業関係遺跡発掘調査報告　小御門城跡・クルヘキ遺跡・播沢遺跡・北脇西窯跡・松尾遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
177. 県教委・協会（1983）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書10-2』
178. 県教委・協会（1990）『森西城遺跡・十禅師遺跡』
179. 県教委・協会（1999）『十禅師遺跡』
180. 県教委・協会（1995）『建部北町古墳群・浄土寺遺跡』
181. 県教委・協会（1995）『浄土寺遺跡・野田代遺跡・風呂流遺跡』
182. 日野町教委（2003）『中甲津遺跡・松尾遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
183. 日野町教委（1988）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告　宮ノ前遺跡・中甲津遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
184. 日野町教委（2001）『西中道遺跡・中甲津遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
185. 日野町教委（1992）『音羽城跡・松尾遺跡・西中道遺跡・猫田遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
186. 県教委・協会（1985）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書12-4』
187. 県教委・協会（1996）『野田道遺跡』
188. 日野町教委（1991）『県営かんがい排水事業関係遺跡発掘調査報告　小御門城跡・クルヘキ遺跡・播沢遺跡・北脇西窯跡・松尾遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
189. 日野町教委（1991）『播沢遺跡・五斗左遺跡・松尾遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
190. 県教委・協会（1997）『風呂流遺跡2』
191. 日野町教委（2001）『日野中部土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告　松尾遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
192. 日野町教委（2004）『日野中部土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告　松尾遺跡・五斗井遺跡・西中道遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
193. 日野町教委（2005）『播沢遺跡・野辺遺跡・松尾遺跡・北代遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
194. 日野町教委（2001）『松尾遺跡・十禅師遺跡・大屋神社・杉杣寺遺跡・確認調査』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
195. 日野町教委（2001）『日野中部土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告　松尾遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
196. 日野町教委（1999）『松尾遺跡・北代遺跡・樋之口遺跡・西中道遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
197. 日野町教委（1992）『音羽城跡・松尾遺跡・西中道遺跡・猫田遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
198. 県教委・協会（1997）『松尾遺跡・浄土寺遺跡』
199. 日野町教委（1988）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告　宮ノ前遺跡・中甲津遺跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
200. 県教委・協会（1987）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書14-6』
201. 竜王町教委（2007）『竜王町内遺跡発掘調査概要報告書　平成16･17』竜王町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
202. 竜王町教委（2004）『竜王町内遺跡発掘調査概要報告書　平成10～12』　竜王町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
203. 竜王町教委（1993）『山副氏館遺跡』竜王町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
204. 県教委・協会（2004）『下五反田遺跡』
205. 安曇川町教委（1995）『下五反田遺跡発掘調査報告書』
206. 県教委・協会（1990）『正伝寺南遺跡』一般国道161号線建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ
207. 県教委・協会（1978）『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書5』

※県教委＝滋賀県教育委員会、協会＝財団法人滋賀県文化財保護協会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会、町教委・市教委＝町教育委員会・市教育委員会
栗文体振＝栗東町文化体育振興事業団・栗東市文化体育振興事業団

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置づけてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願いいたします。 (S.S)

紀要　第30号

刊行年月日：平成29年（2017）３月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 ／ (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

http://www.shiga-bunkazai.jp/

印刷・製本：三星商事印刷株式会社